総合文化研究所シンポジウム
欧米文学から見る日本翻訳史

報告　山口裕之

翻訳は、総合文化研究所のメンバーにとって、実践的な活動としてもきわめて重要なテーマであり、研究所はこれまでも翻訳に関わるさまざまな催しを継続的に行ってきた。このシンポジウムは、一年前の同時期に開催されたシンポジウム「翻訳という創造空間」（『総合文化研究』第二十一号一一八―一二〇頁に報告掲載）と同じメンバーによって行われたものであり、昨年度のシンポジウムの続編といえるものである。

「欧米文学から見る日本翻訳史」という今年度のシンポジウムのタイトルが意図しているのは、近代日本の翻訳史を規定してきたと見なされている「欧米文学」を問い直す視点である。明治以降の日本近代文学においては、文学の扱う内容ももちろんのことながら、語るための日本語そのものをあらたに作り上げてゆくことが、欧米の言語からの翻訳プロセスと密接に結びついていた。欧米化としての近代化を進めるためには、翻訳を通じて欧米の知識・思考を取り入れる絶対的な必要性があったが、もともと日本語に存在しない欧米の概念の表記を、日本はいわゆる翻訳語としてあらたに作り上げてきた。このような語彙レベルだけでなく、表現、レトリック、シンタックス、表記法など、さまざまな局面において、欧米の言語の思考の枠組みに適合させつつ、近代日本語が形成されてきたという歴史がある。明治・大正の作家たちもまた、欧米の言語・文学からの圧倒的な影響を受けつつ、あらたな日本語の文学を生み出してきた。

しかし、そのように「欧米」という包括的な言い方を便宜上ここで用いてきたが、ある翻訳が英語からのものなのか、ドイツ語からなのか、あるいはフランス語からか等によって、翻訳者の関わる言語感覚、文化的発想は根本的に異なるのではないか。同じことは、ある作家の思考が、どの欧米の言語・文化に決定的に依拠しているかによって、そこで生み出される日本語の感覚は決定的に異なってくるのではないだろうか。例えば、二葉亭四迷、森鴎外、夏目漱石、永井荷風は、まさに彼らの関わる特定の言語世界と結びついていたであろう。これがこのシンポジウムの出発点である。

文学研究者は、多くの場合、自分自身が対象とする言語固有の「国民文学」の領域にまずは中心的に関わる。そこでは対象とする言語・文化のもつ伝統の連関が、研究者たちの感覚を圧倒的に支配している。そのことは翻訳に関わる人たち全般に当てはまるだろう。英米文学、フランス文学、ドイツ文学、ロシア文学、イタリア文学からの翻訳は、単に目標言語が同じく日本語であるということで、同じように扱うことは決してできな

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

い。「欧米文学」からの翻訳を、英米文学、ドイツ文学、ロシア文学、イタリア文学といったそれぞれのコンテクストからとらえるとき、近代以降の日本の翻訳の歴史はまたあらたな姿で浮かび上がることになるのではないだろうか。このような発想のもと、圧倒的な量の翻訳をこれまでにおこなってきたパネリストたちのそれぞれの文学の視点から、翻訳の歴史の一局面をたどっていくことになった。以下、パネリストたちの発表の論点をごく簡単に紹介していきたい。

現代アメリカ文学を主要な対象とする柴田元幸氏がとりあげたのは、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』の翻訳の歴史である。マーク・トウェインの描き出すハックルベリー・フィンの言葉は、主人公の社会層をそのまま体現しつつ、言葉そのものが社会のあらゆる規範から自由であることを示している（そのことは、柴田氏自身による『ハックルベリー・フィンの冒けん』の翻訳の言葉からもはっきりと感じることができる）。柴田氏によれば、新訳とは「ジャンケンのあとだし」のようなもので、確かに新訳の視点からすれば、初期の翻訳に見られるハックルベリー・フィンの声は、マーク・トウェインの意図から明らかに外れた言葉であることを指摘することもできる。また、「誤訳のオンパレード」のような翻訳もある。しかし、柴田氏は「翻訳の質と影響力は関係がない」と強調する。ある種の「誤訳の力」もまた、翻訳の歴史、あるいは翻訳の影響史を形作っているという逆説をわれわれは見落とすべきではないということにあらためて気づかされることになった。

ロシア文学者の沼野恭子氏は、日本の翻訳史においてロシア文学の起点となっていた『露国奇聞 花心蝶思録』から話を始めた。この作品は、高須治助が一八八三年（明治十六年）にプーシキンの『大尉の娘』を翻訳したものだが、状況設定、人物名、語りの人称も完全に変えられ、翻訳というよりもアダプテーションといってもよいもので、これらは明治初期の翻訳の特質の一端を顕著に示すものである。ロシア文学の翻訳が日本語形成において果たしていた役割について考えるときに、いうまでもなく二葉亭四迷について言及しなくてはならない。言文一致の嚆矢とされる『浮雲』第一篇は、一八八七年（明治二十年）に刊行されているが、三遊亭圓朝の講談の言葉を参考にしたとされるその言葉は、同時にまたその翌年に行われたツルゲーネフの「あひゞき」「めぐりあひ」の翻訳の文体とも深いつながりがある。沼野氏は、翻訳で大切なのは音調である、という二葉亭四迷の言葉にとくに着目し、『浮雲』の冒頭に見られるさまざまな髭の列挙だけでなく、その文体そのものがゴーゴリの音調の影響を受けていたのではないかと指摘した。二葉亭四迷は「あひゞき」をもう一度訳しているが（明治二十九年）、この二度の翻訳のあいだに近代日本語の文体がほぼ確立されていく。ロシア語における異質性が日本語のうちに持ちこまれることにより、近代日本語が形成されたのちのいわゆる異化的翻訳の方向性が作り上げられていったことをここに確認することができる。沼野氏は、最後にロシア語において翻訳が不可能なTOCKA（タスカー／トスカ）という言葉の翻訳語の変遷についても言及した。

フランス文学の野崎歓氏は、明治時代の翻訳のうちにすでに見られた原文重視の忠実な翻訳とアダプテーションという両極を前提として、詩の翻訳のうちに、フランス文学に関わる

二つの方向性を取り上げた。一つのあり方は、とりわけ上田敏や堀口大学による詩の翻訳に見られるものである。彼らの翻訳は、意味そのものよりも音調の美しさが際立つものであるが、そのような言葉の若々しさや力は、彼らが訳詩集に取り組んでいたときに若い翻訳家であったということとも関係しているのではないか、この若い言葉が日本文学をとても豊かにした、と野崎氏は指摘する（『海潮音』は上田敏が三十二歳の明治三十八年、『月下の一群』は堀口大学が三十三歳の大正十四年の出版）。このような翻訳の対極にあるのが、筑摩書房のマラルメ全集全五巻である。詩が収められた第一巻では、本文のテクストが三〇〇ページ弱であるのに対して、別冊の解題・注解は七〇〇ページを超える。このような翻訳は、学問的業績の集積といえる。これら二つの翻訳の方向性は、まさに日本の翻訳のあり方を示すものでもある。

現代のドイツ文学を数多く翻訳している松永美穂氏は、ドイツ文学に関わる日本翻訳史にとって礎ともいえる森鴎外を取り上げた（ちなみに多和田葉子の渡独と作家活動が、それぞれ森鴎外とのあいだに百年の差があるという興味深い事実も松永氏は指摘していた）。鴎外は、文語体と口語体の両方について、日本における翻訳と文学全体に対して影響を与えることになったが、彼自身がどのような翻訳戦略・文体を意識していたかは、「訳本ファウストについて」や「不苦心談」においても見て取ることができる。一九一三年（大正二年）に出版された鴎外の翻訳『ファウスト』第一部・第二部の翻訳は、『ファウスト』の翻訳のなかでいまでも傑出したものの一つと見なされているが、松永氏は現在三十五種類にものぼる日本のファウスト翻訳を紹介することで、日本におけるドイツ文学翻訳の大きな流れの一端を示した。また、『ファウスト』のようにドイツ文学のなかで特別な位置を占める作品だけでなく、ヒトラーの『我が闘争』にも七種類の翻訳が存在するという事実には驚きを禁じ得ない。しかし、このことは単にドイツ文学が日本の教養主義的伝統のなかで特別な位置を占めていたということだけでなく、しばしば体制的なものと密接に結びついてきたという歴史的特質を指し示している。

イギリス、アメリカ、ロシア、フランス、ドイツが日本の近代化の過程で決定的な影響力を与えてきたのに対して、イタリアは日本に対してある程度限られた位置を占めるものとなってきた。イタリア文学の和田忠彦氏は、欧米諸国と日本とのあいだの非対称的関係のなかで形成されてきた日本翻訳史において、イタリア文学は「マイナー」言語の宿命として、ある種の迂路を辿ってきたという歴史的経緯があったことを強調する。かつてイタリア文学の新しい情報は、イタリア文学者ではなく、しばしばフランス文学を経由するかたちでもたらされていた。米川良夫も須賀敦子もフランス文学からイタリア文学へと向かっている（ちなみにご自身では言及されなかったが、和田氏自身も同じくフランス文学からイタリア文学へという道を辿った）。反対に、日本文学のイタリアへの紹介についても同じような非対称的な関係が見られると和田氏は指摘する。イタリア文学の受容に典型的に現れるこのような非対称性・不均衡を示すものとして、和田氏はさらにピノキオの日本における翻訳史のかなり独特な展開を例にあげた。日本で最初のピノキオの翻訳は、当時九歳の少女西村アヤが、佐藤春夫による英訳からの

重訳を父親から読み聞かせてもらい、それに絵と物語をつけたものが出版される（一九二〇年・大正九年）という経緯によって実現した。アダプテーションは言語ごとにある程度のグラデーションをもつものであるが、翻訳そのもののもつ力によってそのグラデーションに変化があるということ、そしてそこに近代化の歪みを見て取ることができるということを和田氏は指摘する。

全体を通じて、それぞれの言語圏・文化圏ごとに短時間の素描が行われたに過ぎず、それによって「日本翻訳史」を語ることはもとより不可能である。しかし、このようにごく限られた例示からも、それぞれの言語の文学ごとに日本語への翻訳、日本語形成の場が作り上げられてきたことをあらためてはっきりと感じとることができる、そのような場であったといえるだろう。二〇〇名が収容可能な会場がほぼ満員となるほどの聴衆たちは、予定していた時間を超過して三時間半に及ぶことになったこのシンポジウムでの発表と質疑応答を大いに楽しみ、それぞれに刺激を受けていたと感じられた。

総合文化研究所主催シンポジウム
「欧米文学から見る日本翻訳史」
二〇一八年十一月二十八日（水）

パネリスト：
柴田元幸（東京大学名誉教授・アメリカ文学）
松永美穂（早稲田大学・ドイツ文学）
野崎　歓（東京大学・フランス文学）
沼野恭子（東京外国語大学・ロシア文学）
和田忠彦（東京外国語大学名誉教授・イタリア文学）

司会：
山口裕之（東京外国語大学・ドイツ文学）